

◆◆◆ 2007年の天候

気象庁は、平成20年1月4日（金）、2007年（平成19年）の日本の天候の特徴について以下のとおり発表しました。

○年平均気温は全国で高く、西日本、沖縄・奄美ではかなり高かった

年平均気温平年差は北日本+0.7℃、東日本+0.9℃、西日本+1.1℃、沖縄・奄美+0.6℃で、特に西日本と沖縄・奄美では地域平均統計のある1946年以降でそれぞれ第2位タイの高温となった。4月と7月には低温となったが、一方、1月、2月、8月、9月には顕著な高温となるなど全般に月平均気温が高い月が多かった。

○記録的暖冬・少雪

平成19年の冬は冬型の気圧配置が見られたのは一時的で、ほぼ全国的に気温が高く経過した。東日本と西日本の地域平均気温は、地域平均の統計のある1946/47年の冬以降で最も高く、全国153の気象官署のうち、東京、名古屋、大阪などの63官署で、冬平均気温の高い記録を更新した。また、全国的に降雪はかなり少なく、冬の降雪量は、北陸地方で平年の9%となるなど、北日本、東日本、西日本日本海側の降雪量は地域平均の統計のある1961/62年冬以降で最も少なかった。

○8月は各地で記録的な高温となり9月の残暑も厳しかった

8月は太平洋高気圧の勢力が強く、全国的に記録的な高温となった。8月16日に熊谷（埼玉県）と多治見（岐阜県）で、ともにこれまでの国内最高気温の記録を更新する40.9℃が観測されたほか、101地点（アメダス観測点を含む821地点中）で観測史上1位の記録を更新した。9月に入っても引き続き太平洋高気圧の勢力が強く、9月の月平均気温は西日本で地域平均統計のある1946年以降で第1位の高温となった。

○年降水量は全国的に少なく、西日本を中心に渇水にみまわれた

年降水量は全国的に少なかった。春から6月にかけて西日本を中心に高気圧に覆われやすかったため小雨の状況が続き、一部では渇水にみまわれた。その後、梅雨前線や台風の影響で小雨状況は解消したが、秋以降は再び高気圧に覆われやすかった西日本で顕著な小雨傾向であった。

○梅雨入りと梅雨明けはともに遅れた

6月から7月にかけては太平洋高気圧の日本付近への張り出しは平年より弱かった。このため、6月は移動性高気圧に覆われる日が多く各地で梅雨入りが遅れ、7月は梅雨前線が本州付近に停滞し各地で梅雨明けが遅れた。

○台風発生数、接近数、上陸数は平年程度

台風発生数は24個（平年26.7個）、接近数は12個（平年10.8個）、年間上陸数は3個（平年2.6個）といずれも平年並であった。7月中旬には台風第4号が九州に上陸しその後本州南岸沿いに北東進し、停滞していた梅雨前線の影響も加わり沖縄・奄美から東北部にかけての各地で記録的な大雨となった。

詳細は、気象庁ホームページ（<http://www.jma.go.jp>）上の報道発表資料（<http://www.jma.go.jp/jma/press/0801/04b/tenko2007.html>）をご覧ください。